



2012年(平成24年)
12月号(No. 811)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成24年度年次晩餐会開く 200人超の新人迎える	1
小泉弘「装丁山味」で、秩父宮記念山岳賞を受賞	4
学生5人で初の海外登山へ	5
～未踏峰に「THUKPA KANGRI」と命名～	
第49回学生部マラソン大会と第1回クライミング大会	6
旅行業法に関する勉強会開催	6
追悼 村木潤次郎先輩を偲ぶ	7
台北で講演、未踏査の領域に関心	8
東西南北	9
公益社団法人にふさわしいJACIになるために	
支部だより	10
広島支部	
活動報告	11
図書委員会/集会委員会/山遊会	
図書紹介	15
図書受入報告	15
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	18
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時
年末年始休室 12月29日～1月6日

平成24年度年次晩餐会開く 200人超の新人迎える

一年を締めくくる年次晩餐会では、今回若い会員たちの出席が目立った。新入会員のなかにも若手が増えてきており、会長の挨拶の通り、会員減少、高齢化に歯止めがかかりつつある。また年次晩餐会会場では初の試みとなる、図書交換会も開催された。

■427人が出席

平成24年度年次晩餐会は12月1日、東京・品川の品川プリンスホテル・アネックスタワーで開催された。全国から427人の会員が参加し、なごやかに歓談した。この1年間、200人を超える新入会員を迎えることができた。ずっと続いていた会員の減少・平均年齢の上昇に歯止めがかかってきた。尾上昇会長は「反転攻勢のときがきた」と一層の努力を呼びかけた。

■会長挨拶 反転攻勢のとき

いつものように晩餐会のテーブルには「富士山」、「北岳」などの山名がつけられた。皇太子さまは、愛子さまの誕生日でもあり、残念ながら出席できなかった。「日本山岳会のますますの発展を祈ります」とのメッセージをいただき、尾上会長が紹介した。会長は、さらに次のように挨拶した。「会の現状・課題を説明したい。会員は約5200人、平均年齢は



壇上に並ぶ新入会員。若い顔も目立つ

67歳だ。会員数、平均年齢とも、ここ3年間変わっていない。それまでは年々100人ぐらいうずつ減少し、年齢は1歳ずつ高くなってきたではないか。これまであらゆる機会を通じて入会促進、支部の

増強を訴えてきた。危機を感じていただいたと思っている。反転攻勢のときがきたと申し上げていい。引き続き努力を続けてほしい」

■新永年会員は28人

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は59人。寛仁親王殿下、名誉会員で18代会長・マナスル登山隊長を務められた村木潤次郎、名誉会員の高木崎男、理事を務められた宮下啓三、松永敏郎、支部長を務められた中野和郎、「山日記」でお世話になった坂本矩祥の各氏らが帰らぬ人となられた。心からご冥福をお祈りいたします。
新しい永年会員は28人。1962年4月から翌年3月までに入会し、以降継続して50年間、活躍さ

れた会員および復活会員。16人が出席し、スタッフがそれぞれの会員席に向き会員章を手渡した。

新永年会員(会員番号順)

上村幹雄、浅山貞郎、堀越利男、宇田川允敏、伏見紀子、永島賢司、山崎幸和、高田允克、田井英男、廣瀬貞雄、渡辺幸栄、井野進、本田誠也、大貫良夫、桑原勇蔵、高橋正、白木貞次、牧田洋子、竹端節次、原田至康、長田義則、荻野恭一、大野正子、清瀬祐司、松田順次、古屋学而、田村義彦、斉藤裕二

新永年会員を代表し、伏見紀子会員が挨拶した。明治大学炉辺会所属、68年に日印合同婦人ヒマラヤ登山隊に参加した。「入会しない」とヒマラヤに行けないと思った。印パ戦争のあおりで南米などに行っていたが、68年にやつとヒマラヤにはいることができた。当時の年次晩餐会は出席者120〜130人ほど、女性は2、3人だった。ルームは神田ニコライ堂の近くにあった。日本山岳会に育てていた「だいた」などと振り返った。

秩父宮記念山岳賞など

第14回秩父宮記念山岳賞は、小

泉弘会員の「著書『装丁山味』とこれまで出版した山岳書籍デザイン」の業績」と決まった。表彰式が行なわれた。装丁された山岳書籍は500冊を超える。小泉会員は「書籍の形を整えるというか、デザイン、装丁の仕事の評価していただいたことがなによりもうれしく光栄に思う」などと語った。

続いて渡邊玉枝会員に会長特別表彰が授与された。ことし5月、チョモランマに登頂し、自己のエベレスト女性最高齢登頂記録を10年ぶりに更新した。14年度にも、会長特別表彰を受けている。渡邊会員は「こんどはチベット側から登りたいという単純な気持ちだった。登れる、登れないは問題ではなかった。村口德行カメラマンに声をかけた。仲間と一緒に登れたことが幸せだった」と語った。

■新入会員は229人

続いて新入会員の紹介。ことしは229人が新しく会員に加わった。昨年は169人だった。うち48人が出席。代表して波多野あをい会員が挨拶した。「はるか昔、飛行機からK2を見た。感動した。そのときの光景が目には焼きついてい

る。夢を持ち続けたい」と挨拶、大きな拍手を誘った。

恒例の鏡開きは尾上会長のほか、秩父宮記念山岳賞を受賞した小泉会員、会長特別表彰を受賞した渡邊会員、竹内哲夫・秩父宮記念山岳賞審査委員長、そして新永年会員を代表して伏見会員の5人で行なった。お酒は故今西壽雄名誉会員の夫人から寄贈のあった「四海土」。日下田實名誉会員の音頭で乾杯した。会食が始まった。会食をはさんで全国31支部が紹介された。参加者は紹介されるたびに立ち上がりハンカチを振った。恒例のイベントが会場を盛り上げた。

■秩父宮記念山岳賞など記念講演

晩餐会に先立ち午後2時から記念講演・海外登山報告会があった。

秩父宮記念山岳賞(小泉弘会員)

16歳のときにデザインと山登りの2つの世界に同時に出会った。二十代の終わりに表紙デザインを担当するという形で登山がデザインに飛び込んできた。30歳で独立して事務所を持って以来、山岳図書のブックデザインは仕事の大きな柱となった。読者のことを考えて装丁したことは一度もないという。

読者としての自分が、この本はこうあってほしいと思う姿を求めて、著者あるいは編集者を口説き落とすように装丁をしてきた。著者がいて装丁者がいて印刷、製本がある。山登りにいるようなものだ。装丁がしゃべり過ぎないように心がけているとも。とくに写真や絵はくせものだ。筆者以上におしやべりしてしまう。コントロールすることが大切だ。

学生部インド・ザンスカール登

山遠征隊(報告・大塚泰祐隊長、高山智之隊員) 学生5人でインド北部のザンスカール地域にある6165^{メートル}と6045^{メートル}の未踏峰に挑んだ。8月17日デリーを出発し、28日にBCを設営、9月2日アタック開始した。日中は避け真夜中に出発した。最初は表面に薄く雪の被った傾斜60〜70度程度の氷壁次に柔らかい雪の斜面、再び氷壁に変わりクレバスもいくつかあった。稜線にあまりガレ場と雪面を歩き7時20分、全員が登頂した。命名権を得てツクッパ・カンリ(可能性のある山の意)とした。

パタゴニア・フィツロイ北ピラ

ー登攀(報告・横山勝兵) 1979年生まれ、先鋭的なクライミン

グ活動を続け、数々の初登攀記録をつくっている。2009年、カナダ最高峰・ローガン南東壁を初登攀しピオレドール賞を受賞した。その授賞式に集まった仲間からパタゴニアの素晴らしさを知った。ことし1月20日、パタゴニア・フイツロイ山群の登山基地エル・チャルテンに着いた。北ピラーは標高差1200メートルの大きな岩壁だ。900メートル登り、少し下がって残り300メートル登った。岩は硬くクラッククライミングを楽しんだ。寒かった。日差しのある10時過ぎから行動開始、日が暮れて午前1時ごろまで登った。翌朝も快晴だった。夜8時頂上に到達した。日本を出てから40日目に山頂に立つことができた。

会長特別表彰／チヨモランマ登頂女性最高齢記録更新(渡邊玉枝)

モレーンの上を歩く姿がスクリーンに大きく映し出された。冒頭15分ほどの動画を見せていただいた。村口カメラマンの撮影だ。氷河を登ることに違いはないが、チベット側はモレーンだ。ハイキングのような気分で歩いたという。多くの登山者が挑戦していた。雪と氷の上にくつものグループが

続くのが見えた。固定ロープを頼りに頂上を目指していた。頂上へのアタック開始は5月18日午後6時半。ほぼ10時間かけて到達した。ガレ場だった。風がすごかった。前回は誰もいなかったが、今回は混雑していた。ルートは渋滞し足止めされることもあった。「普通の人が普通に登った」と繰り返し返した。大ケガは05年にはアイガーに登った直後だったが、08年にモンゴル的高峰に登り復帰のメドをつけた。前回のエベレスト登山から10年を経過しようとしていた。「改めてチベット側から登りたい」と思うようになった。

■皇太子さまの写真を飾る

図書交換会会場の入口に皇太子さまの写真「雲遊ぶ間ノ岳」が飾られた。北岳山頂から間ノ岳を展望した作品だ。平成2年7月、南アルプスに登られたときに35メートルで撮影されたという。デジタル処理し全倍の大きさに引き伸ばした。羽田栄治資料映像委員は「雲を巧みに写し込み、南アの魅力を表明した素晴らしい作品」と評価していた。



皇太子さまによる南アルプスの写真

■懇親山行は愛鷹山・越前岳

翌日の懇親山行は集會委員会が主催し富士裾野の愛鷹山・越前岳で行なった。尾上会長ら総勢115人が参加した。午前7時30分、JR品川駅に集合、大型バス2台で出発し、登山口の十里木に10時到着。1504メートルの越前岳まで標高差630メートルを元気に登った。残念ながら一日中曇りで寒かった。富士山はバスのなから、ちらりと見えただけ。頂上付近は5センチくらいの霜柱で凍りついていて、途中の展望台からの紅葉は素晴らしかった。2時20分帰途につき4時40分品川で解散。静岡支部から蜜柑をいただいた。

(写真・澤村貴和、文・高橋重之)

図書交換会―図書委員会

会員から山岳図書を募り希望者に頒布する図書交換会は、深田久弥・山崎安治の両氏が図書委員だった1968年から続いているが、年次晩餐会会場での開催は初めてだ。会場には430冊の本が並び、午後2時30分から抽選が始まった。本ごとの頒布申込書には、事前申込者の名前が記入済みである。それに当日の参加者が名前を書き加えていく。そして進行係がくじを引き、当たった人が本を手にして会計を済ませていく。

なにげなく部屋に足を運んだつもりが、つい本探しに夢中になる人や、知人と懐かしい本を前に思い出話に花を咲かせる人で会場は熱気にあふれた。結果、事前申込50名に加えて会場での申込者は110人、人気本は20倍ちかい倍率になった。本とは不思議なものである。一冊の本がそこにあるだけで、人の心を誘い、人と人を繋ぐ。終了は5時、売れ残った本は15冊だった。何人もの人から「来年もやってほしい」と声をかけられ、図書交換会は無事に盛会に終わった。

(三好まき子)

AWARD

小泉弘著の『装丁山味』で、
秩父宮記念山岳賞を受賞

『装丁山味』という本がある。

著者である小泉弘さんが、長年にわたって装丁してきた数多くの本のなかから、特に「山の本」に焦点をあててまとめられたものだ。

60冊ほどの本のジャケットを、著者や編集者との交流など本にまつわる軽いエッセイとともに紹介されたユニークな本である。ジャケットや表紙の写真とともに、書籍の仕様や使用した紙の種類などスベックも豊富で、小泉さんの「山の本」へのこだわりが随所にちりばめられている。

その本が、平成24年度の秩父宮記念山岳賞を受賞した。平成10年度に創設された同賞は、山について造詣の深かった故秩父宮殿下・妃殿下の事績を永く記念するため

に、山に関連する顕著な活動や業績を表彰し、登山活動の奨励と山の文化の高揚に資することを目的に生まれたものだという。これまでも『新編・ヒマラヤ文獻目録』を作成した薬師義美さんや、11次にわたるマッキンリーの気象観測を行なってきた大蔵喜福さん、運動生理学の普及と啓蒙に努められた山本正嘉さんが受賞している「名誉」ある賞だ。

小泉さんは、36年にわたって、約500冊を超える山岳書を装丁制作してきた。そして今回、その集大成ともいえる『装丁山味』という本を著わし、これまでの装丁とその半生を振り返った。その業績が評価されて今回の受賞となったのである。

推薦人の一人であり、これまで多くの山岳書の編集をされてきた大森久雄さんは、次のようにその理由を記されている。

「図書は、それを書くひと（著者）、つくるひと（編集者・デザイナー）

の intellectual passion 知的情熱のかたまりである。それは人間活動の最も尊い作業の結果である。知的情熱のないところに人間の精神活動の果実は熟さない」

そしてもう一人の推薦者、明治大学教授の飯田年穂さんも「登山の歴史を見ても、つねに山岳図書は山岳文化を創出し発展させる主要な力でありつづけてきた。それが登山活動、山と人間、登山の精神に関するかけがえのない表現であるからである」と、述べている。

この二人に共通しているのは、登山がただ単に山に登るという行為にとどまるものではなく、その背後にある精神活動を重視されて

いる点である。つまり登山は、人間の精神活動そのものであり、やむにやまれぬその発露のかたが山の書物なのである。

最近、「山の本が読まれなくなつた」とよく言われているが、登つた山の数だけを競い合うような風潮からは、なかなか山の文化も育つてこないに違いない。百年という山の文化を育んできたのは、まぎれもなく山岳会の先輩たちであり、表現として著わされてきた山の書物であろう。先人たちに蓄えられているはずだ。

本は、人間の思考や行為と深く結びついている。「山の本」もしかりである。そうした人間の「知的情熱」を、本づくり、装丁という仕事に結実させてきた小泉さんの業績は計り知れない。

『装丁山味』とこれまでの業績によつて秩父宮記念山岳賞を受賞されたことは、長年、山の本に関わつてきた一人として、この上ない喜びである。

(神長幹雄)



年次晩餐会で尾上会長から表彰される小泉弘さん

学生5人で初の海外登山へ 「未踏峰」に「THUKPA KANGRI」と命名

四年間、憧れ続けた海外登山がようやく実現した。

遠征が終わってみると、あんなに遠かった海外登山がとても身近なものに変わったことを実感する。遠征前は「本当に自分などに遠征ができるのだろうか」などと考えて足踏みしていたのが、今では「次はよりレベルの高いスタイルで登れるようにしよう」と、明らかに自分の中で海外登山に対する考え方が変わったのがわかる。遠征は、行くまでが大変だと聞いていたが、まさしくそのとおり



山頂にて、メンバー全員

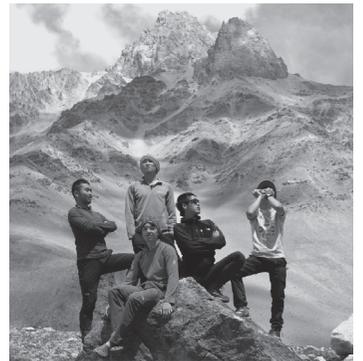
だった。マイナーな地域を選んだため、情報が少なく、取り扱っているエージェントも少なかった。日本語が通じないので、当然英語のやりとり、果ては国際電話による交渉まで行なった。出発1カ月前に登山許可書が来るまでは、安心できなかったが、届いたその時に、ようやく海外登山が現実のものになると歓喜した。

このようにして、中央大学の大堀泰祐(23)を隊長に、立教大学の三井健生(23)、日本大学の飯田祐一郎(22)、法政大学の久保田真平(21)、三重大学の高山智之(21)という、別々の大学で別々の登山人生を送ってきた人間が、「初の海外登山」「未踏峰」という目標に



ルートのほぼ中間にあたる部分を登攀

向かって団結し、全員が同時に無事に山頂を踏んできた次第だ。



BC入り前日。みなやる気にあふれた様子

この遠征は未踏峰PK6165に登るというだけではなく、情報が乏しい地域へ学生のみで挑むことに意義があった。挑む山のレベルは高くせず、遠征というものを味わうための遠征である。2週間かけてインドの北部奥地を歩き、短いながらも氷河を攻略し山頂を落とした。また帰りはインドの小チベットを味わいながら雪原を、荒野を、オアシスを、さらには軍駐屯地を、果ては一周するのに1週間かかる湖を見て帰ってきた。

これらの経験から得たものは大きく、「これを得た」と具体的に、端的にいうことは難しい。ただ確実にいえるのは、この遠征が今後の自分達の登山人生の大切な土台の一部となり、4年間の山岳

部活動から次の段階に進むための、最高の一步となったということだ。そして何よりも、この遠征に参加したメンバーは、思い出を語り合える一生の仲間となった。

なおPK6165に登頂した結果、山の命名権を得ていたのだが、実際に山名をつけるとなるとなかなか決まらなかった。山名はラダック語にするために現地ガイドと再び連絡を取ることでも時間がかかってしまった。帰国後しばらく経ってから、隊員それぞれが遠征を自分の中に経験として、思い出しとして吸収していく中で、あらためて山名を話し合った。その結果、この遠征で得たものはわれわれの今後の可能性を広げてくれたはずであるから、「可能性」という言葉をラダック語にした「THUKPA」にしようとした。そして最終的に「峰、氷河の果て、頂上」などの意味をもつ「KANGRI」と合わせて山名を申請し、「THUKPA KANGRI」が自分たちの初めての遠征で登った未踏峰の名前となった。

この遠征を支援し、ご指導くださったたくさんの方々に、この場を借り深くお礼を申し上げます。

第49回学生部マラソン大会と 第1回クライミング大会

11月10日快晴のもと、恒例の大学対抗マラソン大会が皇居で開催された。参加人数は65名。午前は4周のリレーによる団体戦であった。

優勝校は、早大71分31秒。2位Ⅱ東農大、3位Ⅱ明大。続いて午後は1人3周の個人戦。1位Ⅱ淀川裕司(東農大)54分24秒、2位Ⅱ高橋颯(東農大)、3位Ⅱ黒河輝信(早大)。今年は関東圏からのみの参加であったが、来年は50回記念大会となるため、全国各地からの参加を期待したい。



今後もクライミング大会は継続していきたい

翌11日、神奈川大のクライミング・ウォールで初のクライミング大会が開催された。午後から悪天の予報であったが、降雨直前で無事終了した。

午前中に予選が行なわれ、リードの部と初心者向けトップロープの部で競った。午後からは上位4名で決勝戦。リードの部、優勝は山本桂太郎(慶大)、2位Ⅱ前田優樹(法大)、3位Ⅱ淀川裕司(東農大)、4位Ⅱ荒木直之(慶大)。決勝戦はルートを再設定し、優勝者のみトップにリーチするという絶妙のセッティングであった。女子は遠藤由布(神大)が優勝。トップロープの部優勝は井藤将大(法政大)。

合宿所の宿泊、ルートセッター、審判、ビレイヤーなど、神奈川大学の全面協力があり、実現した。マラソン、クライミングとも東農大のレベルの高さが光った。また今年は、学生部委員たちが景品集めに奔走してくれたおかげで、例年以上に豪華な景品をいただくことができた。

(古野淳)

旅行業法に関する勉強会開催

集会委員会をはじめ、各委員会と支部では参加者募集型の山行などを活発に行なっている。そこで、こうした会活動が旅行業法などに照らして問題はないのか、それとも改善すべき点があるのかを学ぶ機会とするため、日本山岳会ルームにおいて、11月15日午後7時から、旅行業法に詳しい畑敬弁護士を講師に迎えセミナーを開催した。西村、吉永の両副会長をはじめ、出席した委員会は、総務、財務、集会、指導、科学、自然保護、ユースなどにおよび、北海道支部からの出席もあり、室内が満員の状態となった。

セミナーは旅行業法の基礎の説明からはじまり、旅行業とは、利益を得るなどの「報酬性」、継続して旅行業にあたる行為を行なうなどの「事業性」、計画し手配するなどの「行為性」の3要件から成り立つことを学んだ。また旅行業は4種類の登録制度によって営むことのできる事業であり、無登録営業は法律違反であることが解説された。

さらに、あらかじめ想定問答と

して5事例をあげ、それが旅行業にあたるかどうかを検討した。現地集合・解散で経費はワリカシという日帰り山行は、報酬性も行為性もないので旅行業法に抵触する行為ではないことが説明された。

一方で、企画立案から手配、引率、支払、さらに包括(まとめ何円)料金とし、引率者は経費負担をせずに事後精算も発表しないという方法は適法とはいいがたいとの解説もあった。

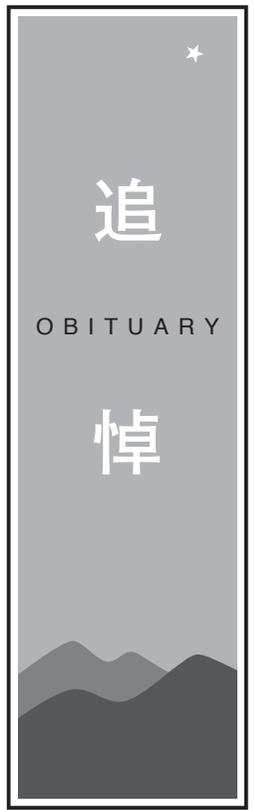
海外トレッキングなどで旅行業者が関与する場合には、その業者の登録種別と募集の方法について留意すべき点多々あることが説明された。

なお配布資料には、募集型団体登山に関するQ&A「そのときどうする？」が添付されており、事故対応の重要性が再認識された。

(黒川恵)



スズラン



村木潤次郎先輩を偲ぶ

日下田 實

村木さんは昭和24年4月に日本山岳会に入会、会員番号は3472番、平成7年5月から平成9年5月までの2年間会長をつとめ、平成9年12月に名誉会員に推薦されております。

村木さんは昭和15年4月に早稲田大学第一高等学院理科に入学、山岳部に入部されました。昭和19年に山岳部代表委員主将に就任、



村木潤次郎(むらき・じゅんじろう)

1923年、東京に生まれる。明星学苑中学校で山岳部に在籍。山岳部顧問であった英語教師で山岳写真家の船越好文氏に影響を受ける。
 1940年、第一早稲田高等学院に入学
 1946年、大学学部理工学部卒業
 1947年12月～48年1月末、北海道ベテガリ岳合宿にOBとして参加
 1952～56年、第一次～第三次マナスル登山に連続参加
 1959年、日本山岳会ヒマルチュリ登山隊長を務める
 1987～1991年、日本山岳会副会長を務める
 1995～1997年、日本山岳会会長を務める
 1997年、日本山岳会名誉会員に推挙
 2012年10月27日、逝去。享年88
 著書に、『ヒマルチュリー雪原と氷壁の山』(毎日新聞)。
 訳書に、レーフ・イザードの「雪男探検記」(恒文社)がある。

ご承知のとおり昭和19年は戦争のさなかであり、我が国の敗色が日に日に濃くなってきた年でありました。山岳部に限らずどの部でも上級部員で兵役にあるものは内外地を問わず召集され、あるいは工場に、農村に動員され、部の活動は困難になってきていました。村木さんも終戦時には長野県の小諸の工場に動員されていたと聞いております。この年の秋には早稲田大学では各運動部の活動を停止しており、運動部はすべて休部になっ

ております。

翌20年夏に戦争が終わり、召集されていた部員は復員し、動員されていた部員も学校に戻って参りました。各運動部も部活動再開に向けて動きはじめておりました。山岳部でも昭和21年2月に部活動再開に向け、OB、現役の打ち合わせ会を開いております。村木さんは最上級部員として部活動再開のため、活躍されております。さらに戦後の山岳部活動の原点となつたベテガリ岳遠征にはOBとして、また副隊長格として参加されております。

日本山岳会では昭和27年から5年間にわたり行なわれたマナスル登山隊には、第一次、第二次、第三次の隊に参加され、京都の故今西壽雄さん、慶應の故加藤喜一郎さん、山田二郎さんらとともに登山隊の中心隊員として活躍されたことをご承知のとおりであります。大学では理工学部採鉱冶金科にすすまれ、昭和21年3月に冶金科(現在の金属工学科)を卒業、大学院にすすみ大学の鋳物研究所に勤務されております。大学に近いところにおられましたので、積極的に現役の指導にあたられました。

現在の山岳部があるのは、村木さんのおかげであるといっても過言ではありません。

村木さんは鋳物研究所から富士鉄にうつられ東海製鉄所に勤務され、さらに新日鉄八幡の研究所に勤務されました。この間、韓国の浦項製鉄所の建設に関与されておりますし、工学博士の学位も取られております。

このように本学の製鉄の分野でも、山登り分野でも最高の活躍をなされ、八幡の中央研究所の副所長で退職されております。

私は昭和27年に代表委員主将に就任しましたが、当時村木さんは鋳物研究所におられましたので、たびたび村木さんをたずね、指導を受けておりましたし、第二次、第三次のマナスル登山隊に隊員として参加し、村木さんには大変お世話になりました。村木さんは私にとりまして、当時の山岳部員にとりまして、忘れることのできない先輩であります。

平成24年10月27日、88歳でお亡くなりになりました。法名高秋院峻岳潤徳居士。
心からご冥福をお祈り申し上げます。

海外登山事情

台北で講演、未踏査の領域に関心

中村保

11月1～4日の4日間、台北に行き、歓迎されました。台北でのレクチャーで海外講演は14カ国、28回になりました。

今回の講演は、CTMA(中華民国健行登山会)とCTAA(中華民國山岳協会)の招聘によるものでした。CTMAの副理事長でアジア山岳連盟UAAAに関わる黄一元さんが、熱心にプロモートしてくれました。日本でいえば、CTMAは日本山岳協会(JMA)、CTAAは日本山岳会(JAC)に相当すると考えていいでしょう。

講演の時期を11月上旬に選んだのは、台北で11月3～6日に開催された第9回世界山岳医学大会(2012ISSMM)の初日の特別講演に私の『ヒマラヤの東・最後の辺境——チベットのアルプス』をハイライトするために黄さんが配慮、根回しをしてくれたお蔭です。

台湾の山岳界はヒマラヤ登山では後発ですが近年活発になり、CTMAのなかにヒマラヤ研究グル

ープをつくり熱心に勉強を始めています。先駆者でもある日本のヒマラヤ登山の実績を調査研究し、将来への展望を描こうとしています。JAC英文ジャーナル『Japanese Alpine News』をたいへん注目し、評価してくれています。その流れに沿い、未踏査の領域に強く関心をもち、今回の招聘が実現しました。講演(2回とも英語)のあとの質問は活発で多岐にわたりました。

世界山岳医学大会のメインスピーカーには、京都大学教授であり学士山岳会会長の松林公蔵さんと鹿屋体育大学教授(国立スポーツ科学センター機関紙編集委員)の荻田太さんがおられました。各セッションでお話をされる方々、その他参加者の中に多くの日本からの医学関係来訪者の名前がありました。

私にとって嬉しかったことは、松林公蔵さん、および京都大学学士山岳会重鎮の医師・中島道郎さんに講演をお聞きいただいたこと



CTMA陳慶章理事長(左)と中村氏

です。アメリカの友人の医師でユタ大学准教授の登山家(ヒマラヤの本出版・共著、JACに寄贈)、ジョージ・ロドウェーさんもスピーカーとして参加しました。今回は欧米での講演のときとは違う感じをもちましたが、充実した満足感を得ることができました。

中国四川省成都市在住の中国登山界の著名なクライマー、劉勇(42歳)さんも、講演を聞きに来てくれました。彼は、昨春秋に四川の難峰・央莫龍(Yangmolang, 6060m)を、米中合同隊のメンバーとして初登頂を果たしています。彼によると、私の『ヒマラヤの東——チベットのアルプス』の情報提供(『Japanese Alpine News』、

『American Alpine Journal』、『Alpine Journal』など)が中国で有名だということです。劉さんは英語が実に流暢です。現在は成都にある四川大学の戸外スポーツ科学研究員です。次はK2北面に挑むそうです。世界の登山界は広いことをあらためて実感しました。

新たな友人ができたことも大きな収穫でした。今後、台北の登山界とは交流が深まっていくでしょう。CTMAの陳慶章理事長から台湾の山の豪華な本、全三巻を贈られましたので、JACの図書室に送る手配をしました。

講演後、質疑応答のなかで必ずといっていいくらい出される質問は、「踏査旅行の費用」についてと、東チベット・四川・雲南の不安定でセンチティブなチベット族圏での「入域許可と登山許可」についてです。前者については、「私は元企業戦士であり、香港駐在の55歳の時から始めた踏査の費用はすべて自前で、スポンサーはいません」と答え、後者については、難しさの特殊実情を説明した後、「当局の許可を取ることよりもっと難しいのは家内の許可です」と締めくくります。

N — 東 西 北 — 東 南 北 — S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

公益社団法人にふさわしいJACCになるために

大森弘一郎

JACCが公益社団法人になったことは、考えてみると凄いい重荷を背負ったことなのだと思います。それを身近で感じますがこれに沿えば、これほど素晴らしいことはないのです。公益活動を熱心に行い、その姿勢に賛同する若い新しい会員が増え、会は生まれかわる……。公益法人とは字の通り組織が公の利益(利他)のための行動をするということです。私も含めてですが、最も利己的な人種である山好き人にとって、これは画期的な自己改革の試練の時です。昔、会は自分が登りたいという利己的な動機でマナスルに登りました。そのときこれを公益活動だとは思っていませんでした。

しかしこの成功が日本人を勇気づけて、公益的成果になったのです。しかし、もうこういう公益活動はあまり期待できないのです。自分が登るだけではなく、人を育て、外国と交流し、自然を復元し、環境保護をし、啓蒙活動をする。そういう行動がこれからは公益活動といわれるのです。気持ちと行動の半分はこうでなければならぬ、私たちの公益法人は大変です。山登りは、目標を持って困難に打ち勝つという修練の場であって、この心と体験を広めることは、多分利他的活動でしょう。だからこの場合、自分たちだけで登るのはなく、他の人に体験を分かち合つことを常に考えればよいのです。そこで「自分の好むところへ他の多くを導く」という気持ちを持ってれば、自分も利他活動を楽しむことができるに違いありません。私が属する同好会、山の自然学

研究会の動きから考えてみます。1995年5月にヨセミテ国立公園に行き、インタープリター活動に接しました。そのレポートがJACCの書庫にあります。古田寛昭(故人)さんたちとその前年夏から始めていた自然解説の活動が、何とそのインタープリターであったことを知りました。ヨセミテ協会会長のメドレー氏(90周年記念講演者)や小野有五さんの影響もあり、さらに腕を磨こうとのめり込むことになりました。インタープリターに「自然の言葉を翻訳して人に伝える」の意味があることも知りました。自然の言葉伝えるには多少の努力とまたお客さんの獲得も重要です。大切なのは、自然に対する愛情と人に対し自然の心を伝える親切心です。知識はそこそこで充分だということとは後で知りました。

しかし今年の夏の16日間の活動では、3つのホテルでの約1時間の夜のミニトークと他の活動に約1000名の集客で、そのうち明神池ガイドウォークは37名。この活動全体をKIP(上高地インタープリター)と自称しています。37名はよい数字とも読めますが、実は活動の中心であるべきガイドウォークの数字としてはまだだ、と感じるのです。いずれこの人数が300名ぐらいになると素晴らしい。そうなれば、KIPがJACCの公益活動に貢献していると胸を張れるでしょう。これにはインタープリター(公益活動)をやりたいと思う人、それによるやりがいと求める、1995年にやりたいと思ったと同じ思いの人が増えることです。今から来年の夏を目指しての研鑽が話題になります。知識と親切心の使い方の習得です。JACCの公益法人にふさわしいグループになるには、会員が好んで公益人にならねばならないということです。これと似たことがJACCの他の部門にもあるのではないかと思ひ、身近の体験を通して考えることを書いてみました。

支部



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

広島支部

支部ルーム開設披露会開催

11月3日、念願の支部ルームを開設することができた。当日は本部の正副会長をはじめ、各支部関係者出席でのお披露目会となった。

ルーム概要／所在地Ⅱ広島市南区大須賀町(15階建の2階) JR広島駅より徒歩10分。面積Ⅱ62・35㎡。ミーティングスペース(20人)、事務、図書&サロンスペース。カードキーシステム採用で24時間入退室フリー。購入価格680万円、諸経費約70万円、内装・什器備品代約300万円。

17年前支部づくりにあたり、熱心に働きかけていただいた神崎忠男氏が「今からの支部はルームを持つべきだ」と発言されたのが強く印象に残った。

支部創設6年目に、中国新聞文化センターから「登山講座の講師

をお願いしたい」との要請があり、

この講座を支部として受け入れ、講師を派遣する条件で合意した。全受講料の36%が毎月支部会計にはいきり、2004年4月受講生20人ほどでスタートした。今では全11クラスを30名余の講師で運営に当たっている。現在では中級講座の卒業生の一部は、講師などの任に当たり、人材の循環が始まっている。

講座が始まって5年が経過した時点で500万円の基金がたまり、あと3年で1千万円が見通せることが判明したので、いよいよ支部ルーム取得を目指すことにし、今年8月購入に至った。と同時に参画意識向上のためにも会員、支部友会員に呼びかけたところ、総額350万円が集まった。

今年度から中国新聞文化センターからの諸経費に対する見返りが、年間ではさらに約35万円程度増え

ることになった。

今後は、会員のクラブライフを充実させながら地域の登山文化の情報センターとしても貢献しなればと……夢は大きい。

(兼森志郎)

開設披露会に出席して

平成19年半ばから法人改革問題に携わってきたが、広島支部からは支部ルーム取得に向けて相談も受けてきたのでその立場からも感慨深い集まりであった。

披露会では兼森副支部長からの経緯説明の後、尾上会長の記念講演が行なわれた。その中で、支部ルーム取得には大きなパワーが必要であるが、その源は設立15年という組織の若さにあると思う。硬直化した組織ではパワーの発揮は難しくなるが、広島支部は一番力のあるうちに成功した。私の出身の東海支部も活性化してきたのは支部ルームを構えて以降であり、ルームの果たす役割はよく分かる。ルームを持ちたいという気概が活性化につながり、さらに持った以降は同好会組織等、ルームに皆が集まる仕掛けを工夫することにより、支部の一層の活性化も図られ

る。

以上の会長の講演の後、各支部長からも賛辞が寄せられた。田中京都・滋賀支部長の「広島支部とは親しい仲にはあるが、今日のこの熱気を支部に伝えるのは大変難しい」との感想が多くを代弁しているように感じられた。

公益法人運営委員会の立場から昨年10月に公益認定申請書を提出したが、その作成のため各支部の事業をすべて整理してみた。明確になつてきたことは、各支部の公益的事業は誰かに強制されて始めたのではなく、発案者の提案に対し、自主的に参加して活動が始まったことがよく理解できた。

たとえば、各支部の登山教室、幼稚園児・小学生の体験登山、非行少年の登山、目の見えない人の登山など、まとめ役はいるが、自発的な参加であることがよく分かる。

支部活動を積極的にやれば、結果として、多くは公益的事業になることは実績で示されており、支部活動活性化には、ルームは大変有効な手段と思われる。

(公益法人運営委員会委員長

佐野忠則)

図書委員会

小泉弘『装丁山味』——
第42回山岳図書を語る夕べ

10月26日、ルームの104号室。語り手の小泉弘さんの傍らには、20冊を超える本が並んだ。『中国辺境歴史の旅』『立山のふもとから』『山は斜光線』『わたしの奥飛騨』『西藏漂泊』『日本百名山と深田久弥』『山こそ我が世界』『エリック・シプトン』『タクラマカン周遊』『本のある山旅』『山の旅 本の旅』『山の本歳時記』『山のABE』『垂直の記憶』『白馬岳の百年』『秘境ヒンドゥ・クシュの山と人』『岳書縦走』『アルプス・コーカサス登攀記』『アルプスの蒼い空に』『わが回想のアルプス』『語りかける山』。語り手の小泉弘さんが装丁した本の、ほんの一部だ。

活
動
報
告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

「えっ、あの本も小泉さんの装丁？」「この本も、やっぱり小泉さん？」そんな声が聞こえる。

小泉さんは、16歳の時に「デザインと山登り」の二つの世界に同時に出合った。以来、「二足のわらじ」を50年。その間に装丁した山の本は500冊を超え、この春には著書『装丁山味』を上梓している。もともとは女性化粧品メーカーのデザイナーだった小泉さんは、30歳の時に独立して山の本の装丁家になる。時は日本中が好景気に一直線に向かう頃、化粧品メーカーの広告デザイナーといえは花形だ。そんな華やかな世界を離れ、等身大の仕事がしたかった小泉さんは、好きな山の本に関わる仕事ができることが嬉しかったという。著書の中でも語られ、小泉さんがいつも口にするのは「山の本は汗の匂いがあるような本ではなく、エレガントでハンサムな本であっ



小泉弘さんと、小泉さんが装丁した本たち

てほしい」ということ。並んだ本の表紙にその心意気が表れている。面白いのは、小泉さんの話が常に並んだ本を手にとりながら進むことだ。本のジャケットを外し、表紙をなで、ページをめくる。本が大好きだということが会場の誰にも伝わる。

たとえば、『アルプスの蒼い空に』の見事な特装本をなでながら「近藤等さんの本を作る時は、近藤さんと一緒にブッククライミング、つまり一緒に山登りをしていくようなつもりでいます」と小泉さんは語る。装丁の仕事は、自分だけにしかない山登りをしていくようなものだという。

そして話は現在の出版状況にも及び、「店頭での効果ばかりを考えると、ポスターを巻いたような本ばかりになってしまった」「電子本は、あれは本ではありません。家電です」とチクリ。時間があつという間に過ぎた。

後日談になるが、小泉弘さんの著書『装丁山味』が本年度の秩父宮記念山岳賞を受賞した。装丁家や編集者は舞台裏の黒子にたえられるが、山の本の世界を陰で支える作り手側の貢献が評価され受賞したことは嬉しいかぎりだ。

(三好まき子)

集会委員会

白馬岳から親不知を縦走

会報『山』を見て、北海道から参加した。9月7日、晴れ。念願がかない、雲一つない快晴のなか今日から白馬岳から親不知縦走だ。猿倉登山口で参加者13名がそろろう。

リーダーは高橋努氏、サブリーダーは菊池武昭氏と紹介があった。リーダーから、「梅海新道は大変な思いをされ10年かけて切り拓いたので。その方は小野健さんです。3泊目は小野さんの梅海山荘に泊まります」との話があった。凄い人がいるのだと驚く。

8時15分、出発。9時35分、白馬尻小屋着。さらに30分ほど登ると、日本三大雪渓の一つ大雪渓だ。見上げると全長3・5kmの雪渓が延々と続き、そのスケールに驚く。11時30分、標高2055mの景観に浸りながらのお昼は格別。長い雪渓が終わると、高山植物とお花畑。さらに進むと急登が続く。そして14時30分、念願の白馬山荘着。8日、白馬岳頂上が朝日に照らされオレンジ色に輝く。6時出発15分後、念願の白馬岳(2932m)に立つ。360度の眺めは朝

日に照らされ抜群だ。山頂から尾根つたいに急下降し、三国境を通過すると花も多くなり、まさに楽園。再び一気に529m下り、小桜ヶ原の湿原に出る。真新しい木道を歩き、朝日小屋に14時10分着。小屋は乾燥室もあり清潔、手料理も美味しかった。

9日、リーダーから「今日は小野健さんが切り拓いた縦走道を歩き梅海山荘泊まりです」との話。5時30分出発。濡れた木道を、黄色に色づいたコバイケイソウを見ながら朝日岳へと進む。6時30分、朝日岳(2418m)着。遠くに、日本海と富山の街並みが見えた。下った所で、2羽の雷鳥に出合う。吹上のコルを過ぎると木道が現われ、照葉ノ池。ここから湿原歩きがはじまり、8時、長梅山(2267m)着。眺めがよく、稜線上部には今夜泊まる梅海山荘も見えた。アヤマ平、黒岩平と広大な草原と湿原がそこそこ現われ、数多くの池が点在、お花畑もあり素晴らしい景観だ。

長い湿原とお別れし、アップダウンを繰り返して12時15分、サワガニ山(1612m)着。山名の由来は、小野さんの山岳会の名前をと



梅海山荘前で

って命名したとのこと。この迫力ある絶景の素晴らしい稜線歩きを、しっかりと目にやきつける。玉の汗を流し長い急登を一步一步踏みしめ14時40分、犬ヶ岳(1593m)、15時、梅海山荘着。下界には、富山の街並みが一望できた。

10日4時起床。好天を約束するかのような素晴らしいご来光だ。4日間の縦走もいよいよ最終日。5時40分、下山開始。山荘の裏からいきなり急下降がはじまる。黄蓮山、菊石山を通り、アップダウンを繰り返しながら下駒岳に着く。8時30分、これから直登の白鳥山へ。炎天下と心臓破りの急登との闘いだ。9時45分、白鳥山

(1287m)着。白い山小屋には、梅海新道開拓の小野健さんの著書があった。10時15分、下山開始。15時55分、梅海新道登山口に出た。梅海新道縦走バンザイ、皆さん、4日間の感動をありがとうございました。

(中谷秀子)

マダガスカルに参加して

サザンクロス街道941kmを南下、中央高地棚田を行く

10月2日、バンコク経由でアンタナリブ(タナ)に着いた。宿は標高1500mの高原、ペランダの下で早起きメンバーが2匹のカメレオンを見つけた。

タナ郊外に出ると大勢の人が川で洗濯、川岸には華やかな色とりどりの衣類を広げて干してある。そのかたわらには、赤レンガの山

街道を4時間ほど走り、第3の都市アンツイラベに着いた。カラフルな人力車が客待ちし、人々の表情は明るい。ピンクサファイア、寄せ木細工、彫刻などで有名な町だ。翌日、再びサザンクロス街道を南下、街道沿いの民家は平屋の土壁に変わる。丘陵地帯を走りア

ンパラヴァウに着いた。明日からテントで3泊4日の登山だ。

* (登山の報告は後記)

下山後、居心地のよいチャラソアキャンプ場(フランス人経営に1泊して鋭気を養う。再びサザンクロス街道を南下。2時間ぐらい走った。一枚岩のマダガスカルエアーズロックと奇怪なゴツゴツした砂岩の山塊が続いた。牧童に導かれたコブ牛の群れ、バオバブの木、アフリカ系住民の村だ。家は身長より低く、枝と草、直射日光がやつと避けられる程度の造りである。トゥリアーラまでサザンクロス街道941^キを走破した。

タナの人々の移動手段はミニバス。莫大な数のミニバスで混雑しているが信号はない。貧富の差もすさまじい。教育を受けられる子は、都市で50[%]とのこと。

喧騒の街を出て東へ、水田が広がる。田植えの季節らしい。耕す代掻き、植えつけ、すべて人の手でやっている。大型トラック、タンクローリーが目立つ。サザンクロス街道とはかなり違っていた。2009年にクーデターがあり、現在は暫定政権。来年は大統領選挙が行なわれるそうだ。

この国の平均寿命は女性53歳、男性57歳とのこと。私たちグループの平均年齢は60歳後半、ピックビー峰に10人も登頂した。この国の人たちは、この実態をどう見るだろうか。

(倉井登代)

マダガスカル第2高峰、ピックビーに登頂して

10月5日、アンバラバオ(1000^メ)からキャンプ地(2000^メ)まで登る。テント生活1日目の夜は思いのほか寒く、気温5度以下のような。オールシーズン寝袋では薄く震えたが、この国では心のこもった温かい寝袋のよ



イサル国立公園にて

うだった。夜は星空観察、どこにいても満天の星空……天の川、南十字星が輝き、その光をまるで浴びているかのように近くに感じながら眺めた。

6日、いよいよ登頂、7時出発。アンドリアンポツ(2050^メ)のキャンプ地まで約1時間15分、なだらかな道を歩く。キャンプ地からは一歩一歩石段を踏みしめ、岩山を「ムーラ・ムーラ」(マダガスカル語でゆっくり)と登る。太陽が高くなればなるほど日差しが激しく照りつけ、気温も急上昇する。この頂上付近は岩稜だが、滑ることはなく歩きやすい。

12時ついにピックビー(2658^メ)、PIC BOBY・犬の名前とか)登頂。三角点はなく大きな石でできたピラミットがあり、横に1956年フランス人の登頂記念のプレートが埋め込まれていた。頂上からの景観は花崗岩の山また山の連続、どこを見ても岩山、素晴らしい眺望だ。現地ガイドいわく、この山は「日本人初登頂」とのこと。日本山岳会が初登頂(?)「やったー!」この感激は忘れられない。

13時下山、1時間ごとに日陰で

休憩しつつ、16時過ぎキャンプ場へ帰着。共同トイレ、シャワー(水)もある。夜はポーターたちがかり火を囲んで歌や踊りを披露してくれ、楽しかった。

7日、昨日登頂した山々を横に見ながら歩く。イアンタラノンビーを経由してチャラソアまでの下山と長丁場の平地を25^キ歩く。4万歩弱、暑いなやつとの思いでバンガローに辿り着く。おとぎの国のような可愛いレンガ造りのバンガローでのビールはおいしかった。

(佐藤登代子)

山遊会

10周年記念講演会

9月29日、四谷の主婦会館プラザエフにて開催。山遊会会員を含む40名ほどの参加者は、2時間を超える講演に熱心に聞き入った。

第一部は、山遊会会員星一男氏によるインド・ヒマラヤ、ラホール・スピティ山域の未踏峰登頂の軌跡。東海支部50周年記念事業のひとつ、第11次インド・ヒマラヤ学術登山隊チエマ峰(6105m)初登頂についてお話しいただいた。

2011年東海支部総会時に壮行会があり、そのとき金一封をいただいた。尾上会長と西濃運輸の会長のバックアップを受け膨大な荷物を搬送することができた。

当地は国境に近く、インド測量局の地図が手に入らない。そこで閲覧させてもらった折に内緒で写真を撮り、ロシアンマップも参考にした。現地でのルート工作には、バタルから頂上までの映像をグループで探し、偵察と合わせて登頂ルートを決めた。チャンドラ・タールで高度順化を行なっていると、当会名誉会員ハリッシュ・カパディア氏に偶然会い、貴重な情

報をいただいた。

7月30日、キャラバンが始まる。C2まで馬が荷揚げをしてくれたので助かった。8月7日にC3に入る。8日、アタックの予定だったが、雪が降り出したため9日早朝にアタックを開始。くるぶしくらいの積雪で、硬い氷河を歩くように逆に歩きやすくなった。11時25分、全員登頂する。双耳峰なので、もう一峰に登る事も考えたが、ヒドン・クレバス、シュルントなどがあり標高からいってもピークに間違いがないので登ったというところで認めてもらった。

遠征にはエージェントを使わなかったのでビザを取るため長い時間と労力を要したが、お蔭で多くの人とのつながりができた。これを次の機会に生かしていきたい。

第二部は、日本蝶類学会会員で蝶の研究者渡辺康之氏に、昨年採取に成功した幻の蝶と言われるブータンシボリアゲハの再発見と採集の様子をうかがった。

渡辺さんは小学3年の時、田淵行男著『高山蝶』を見て自分も採集したいと思った。それ以来の夢であった北海道大学に入学、同時に、昆虫研究会を創立。大学卒業



シボリアゲハについて講演する渡辺康之氏

後は中国、南米、インドなど海外の蝶を探し求め写真を撮り歩いた。1985年に写真集『日本の高山蝶』(序文は田淵行男氏)を出版。

登山については、JAC会員でもある保田直紀氏に教えてもらった。東チベットで日本人が初めて入ったところを中村保氏に話したら、それがきっかけで横断山脈研究会に入るようになった。

シボリアゲハはシボリアゲハ、シナシボリアゲハ、ウンナンシボリアゲハ、ブータンシボリアゲハの4種。ウンナンシボリアゲハは、1981年、北海道山岳連盟のミヤコンカ登山時に再発見、採集されていたが、ブータンシボリア

ゲハは1933年以降確認されていなかった。唯一ある標本は、ロンドン大英博物館に保存されている。研究者の間ではいつかの機運を思い描いていたところにNHKが絡んだのが功を奏してチャンスが到来した。日本からは、6人の専門家とNHKスタッフがブータン政府の関係者とともに採集に東ブータンへ赴いた。

シボリアゲハの採集地は、オグロツルの越冬地になっていて自然を保護している。この集落の人口は50人ほどで、周りは日本の里山によく似ている。その民家を1週間借りて調査した。

8月12日、最初の1頭を、そして滞在中全部で5頭を採集することができた。採卵する様子も確認ができた。卵は木の葉の裏にたくさん産みつけられるが、そこに天敵の蜂がすぐに卵を産みつけ寄生する。卵の8割近くが寄生され、それらは孵化しないので個体数の少ない原因にもなっている。

捕獲した5頭の標本はブータンに引き渡したが、その後ブータン国王が来日された折に2頭日本に寄贈された。そしてブータンの国蝶にもなった。(山崎浩子)



図書紹介

白須浄真・著

『大谷探検隊研究の新たな地平』 アジア広域調査活動と外務員外交記録



2012年8月出版刊
勉誠社 384頁
定価 8400円

本書は、19世紀後半から20世紀初頭「西域探検の時代」に、アジア仏教徒のリーダーを自負する大谷光瑞が組織した探検隊の研究書である。

西本願寺の秘庫が開かれ、委託された著者がその関係文書と外務省の外交記録を資料として、知られることのなかった活動の実態と当時の国際社会の中に映ったその様相を明らかにし、大谷隊の新たな研究の地平を拓こうとする意欲的な著作である。

全体は14の論考の集成で、第一

編では第一次隊(1902~1904)が「毫モ宗教ニ関撃ナキ事ヲナセリ」として、外交ルート通して露国から嫌疑を受けた事実を証左する。第二次隊派遣の直前(1908)、ヤングハズバンド率いる英国のチベット侵攻によって逃れたダライラマ13世との中国五台山での会談を明らかにするのは第二編である。英国からも「何等カ特別ノ使命ヲ有スルモノト」邪推された事態を論ずる。

第三篇は第二次隊(1908~1910)が内陸アジアの調査を終えてカラコルム・パスを越え、インドで大規模な仏跡調査の後、新しく内陸調査を計画したことが、チベット問題と係わりとて疑念を抱かれたことが論じられる。第四編では、最後の第三次隊(1910~1914)の敦煌遺書入手の過程と隊員橘瑞超の消息不明が外交問題化したことが詳述される。

そして関連諸論と資料の第五編には、明治43(1910)年1月24日付在カルカッタ総領事代理平田知夫が「大谷伯一行ノ動静ニ関スル件」と題して外務大臣小村寿太郎へ送付した機密第二号公信が、最重要資料として全文提示されている。なお、原文は罫紙に毛筆・縦書きである。

探検隊は光瑞の壮大な構想と、何ものにも屈しない強い意志、それを実現させる理想に燃える情熱によるところが大きい、いわゆるシルクロード探検とだけで理解すべきでないこと、光瑞の近代を意識した先進的なアジア広域調査活動であることを認識すべきであると著者は言う。論文のため読み進めにくさは否めないが、ここ10年で大谷隊の研究は外交記録を読み解くことで新しい段階へと前進したと知ることができる。

本書と共に、京大人文研・研究協会賞を受けた著者の『忘れられた明治の探検家 渡辺哲信』(中央公論社)を薦めたい。砂塵舞う広大な西域の探検、ときに光瑞26歳、瑞超実に18歳、明治はまさに青年の時代であったのである。

(絹川祥夫)

図書受入報告(2012年11月)

著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
後藤純	ウン、ドス、ウン、ドス：南米のスイス ベルー・アンデスの山旅	318p/22cm	本の泉社	2012	出版社寄贈
吉原宣克	自然を楽しむ歩くスキーハイキング：クロスカントリースキーツアー	215p/22cm	本の泉社	2012	出版社寄贈
石浦邦夫	安曇野の思い出(写真集)：自然と人	116p/25cm	石浦邦夫(私教版)	2009	著者寄贈
山本秀峰(編訳) 村野克明(訳)	富士山に登った外国人：幕末・明治の山旅	247p/22cm	露蘭堂	2012	出版社寄贈
伊佐九三四郎	大河紀行 荒川：秩父山地から東京湾まで	218p/22cm	白山書房	2012	著者寄贈
高澤光雄(編)	北海道登山史年表 1871-2012	45p/21cm	北海道出版企画センター	2012	編者寄贈
松尾修	南アルプス開拓の父 竹澤長衛物語	334p/19cm	山と溪谷社	2012	出版社寄贈
連鋒宗(編著)	臺灣百岳全集：玉山山塊・雪山山脈	255p/31cm	上河文化	2007	中華民國健行登山会寄贈
連鋒宗(編著)	臺灣百岳全集：中央山脈北段	287p/31cm	上河文化	2007	中華民國健行登山会寄贈
連鋒宗(編著)	臺灣百岳全集：中央山脈南段	271p/31cm	上河文化	2007	中華民國健行登山会寄贈
堀義博(編)	自然・登山・探検 [第3編]	157p/26cm	日本山岳会岐阜支部	2012	発行者寄贈
今西錦司書簡集編集委員会(編)	自然・登山・探検 [別冊]：今西錦司書簡集	156p/26cm	日本山岳会岐阜支部	2012	発行者寄贈
筑木力・他(編)	越後山岳 [第12号]	156p/26cm	日本山岳会越後支部	2012	発行者寄贈



**平成24年度第7回(11月度) 理事
会議事録**

日時 平成24年11月14日(水) 19時
～ 21時

場所 日本山岳会集會室

【出席者】尾上会長、西村・吉永副
会長、高原・森・小林各常
務理事、野澤・中山・永田・
萩原・節田・古野・川瀬各
理事、平井・浜崎監事
【オブザーバー】柏会報編集人

【審議事項】

1・平成24年度(第14回)秩父宮記
念山岳賞の授賞について(西村)

10月29日に行なわれた秩父宮記
念山岳賞審査委員会以下が推薦
された。

・受賞候補者：小泉弘(当会会員)
・業績：『装丁山味』とこれまで出
版した山岳書籍デザインの業績

2・名誉会員の推薦について(高原)
(承認)

候補者推薦が1名あったが見
送りとする。(承認)

3・四国支部よりの小島島水頭彰
碑制作寄付金公募について(高原)

峰山公園(香川県高松市)に小
島島水頭彰碑を設置するにあたり、
寄付を募りたい旨の申請があった。

4・独立行政法人国立青少年教育
振興機構「子どもゆめ基金」につ
いて(永田)

ホームページで児童・青少年へ
の育成事業を展開するにあたり、
「子どもゆめ基金」の助成金に応
募申請があった。(デジタルメデ
ィア委員会)。(承認)

5・寄付受入について(小林)

以下の申請があった。
・「ラオスの森づくり」に対して、
国土緑化推進機構から300万円
・「高尾の森づくり」に対して、京
王電鉄から100万円 (承認)

6・広島支部への重複図書の寄贈

について(高原)

広島支部より新ルームに山岳
図書を備えるため、寄贈依頼があ
ったが、寄託とする。図書は図書
管理委員会にて選別する。(承認)

7・入会希望者について(高原)

10名の入会希望者があった。
(承認)

【報告事項】

1・平成24年度財務状況について
(小林)

24年4月～9月は、前年と比べ、
収入が増え、支出は前年並みとな
った。

入会者30名増、山研の利用者76
名増。(ここ数年で最高)

2・寄付受入れの報告(小林)

13件の寄付および4件の助成
金があった。(別紙による)

3・「山の日」制定PT(西村、萩原)

10月に行なわれた「山の日」ネ
ットワーク東京会議の報告書を制
作中。今後、「山の日」制定協議会
の事務局を日本山岳ガイド協会に
置く。

また、11月25日に行なわれる、
岳都・松本「山岳フォーラム」に
おいて「山の日」について講演な
どをする。

4・平成24年度山研利用状況につ
いて(森)

7月、8月は天気がよく、団体
利用や非会員の利用が多かった。
(別紙による)

5・カシオ時計販売結果について
(高原)

10月末で締め切り、220台を
販売した。

6・会員データ管理システムにつ
いて(永田)

12月に最終確認の予定。その際、
一時現行稼働を中止することもあ
るので協力願いたい。

7・年次晚餐会について(高原)

申し込み状況が例年より下回
っているため、協力願いたい。

8・全国支部懇談会開催(千葉支
部)について(高原)

10月20～21日、九十九里浜町で
行なわれ、190名が参加。盛会
だった。

9・第44回新人会員オリエンテー
ションについて(高原)

10月27日、30名が参加。ただ、
委員会からの出席がなかったのは
残念だった。

10・会報『山』11月号について(柏)
「上高地山岳研究所の現状と課
題」、「山の日」制定協議会、青年

部の夏合宿などの記事を掲載。

11・中日新聞東京本社より当会所蔵写真(河童橋のウエストン一行)の「岳人」への転載許可願いがあり、承認した。(高原)

12・富山県より既掲載の当会所蔵写真を「なるほど富山県年表ホームページ」への転載許可願いがあり、承認した。(高原)

13・学生部の第49回マラソン大会および第1回クライミング大会について(占野)

11月11日、皇居周辺でマラソン大会を開催、65人参加。

11月12日、神奈川大学の協力で、初の学生クライミング大会を開催した。

14・「山はみんなの宝」賛同呼びかけ人会議(11月2日)に参加した。(森)

15・第7回ビオレドールアジアに審査員として参加(秋原)

ヒムジュン峰(Himjung 7140m)に南西壁から初登頂した韓国隊、ジャジー峰(嘉子峰 6540m)に新ルートを開拓した中国隊が受賞した。

【今後の予定】

1・支部長会議(12月1日)

会計処理、支部からの問題点を討議の予定。場所をホテルに移す。

2・旅行業法に関する勉強会(11月15日)

報告書を作り、各支部などにも問題の共有化をはかる。

3・中間監事監査を開催(11月19日)

4・文科省「生涯スポーツ・体力づくり全国会議2013」宮崎で開催(平成25年1月25日)

5・植村冒險館開館20周年記念講演会(12月8日)

6・日本勤労者山岳連盟望年会(12月7日)

7・日本ヒマラヤ協会2012華甲望年会(12月8日)

ルーム日誌 11月

5日 総務委員会 高尾の森づくりの会

6日 ルーム検討PT 図書委員会 スケッチクラブ

7日 常務理事会 集会委員会 デジタルメディア委員会

8日 フォトビデオクラブ 山の自然学研究会 山岳地理クラブ

9日 公益法人運営委員会

12日 スキークラブ スケッチクラブ

13日 山岳研究所運営委員会 九五会

14日 理事会 みちのり山の会 休山会 山想倶楽部

15日 図書委員会 科学委員会 法的问题勉強会

17日 平山氏講演会

19日 財務監査 資料映像委員会 総務委員会

20日 総務委員会 00回 スキークラブ

21日 三水会 青年部 つくも会

22日 フォトビデオクラブ 学生部 支部活性化PT 山遊会

26日 総務委員会 YOUTH CLUB 自然保護委員会

27日 総務委員会 図書管理委員会

28日 総務委員会 自然保護委員会 麗山会

29日 総務委員会 公益法人運営委員会 YOUTH CLUB

30日 総務委員会 スキークラブ 11月来室者523名

会員異動(11月分)

物故

松永敏郎(4934) 12・11・21
 沼田敏彦(5486) 12・11・8
 下澤孝安(11069) 12・8・17
 荒井壽一(14834) 12・11・28
 退会

北沢昌永(11852)



平成25年度日本山岳会団体傷害保険募集

財務担当理事

平成25年度団体傷害保険募集が開始されます。

募集期間は平成25年1月7日～31日となります。

例年より締め切りが1カ月早まりますのでご注意ください。

新規加入希望の場合は、下記代理店あて資料請求下さい。

既加入者には、例年通り案内書類が郵送されます。コースの変更、継続停止、家族追加、住所変更等ある方のみ同封の加入依頼書に必要事項を記入の上、下記代理店に返送ください。(1月31日必着)

加入内容に変更ない場合は、従来通り書類の返送は不要です(自動継続となります)。

この保険は通年通して加入できます(中途加入保険料は月割りとなります)。

資料請求先=東京海上自動火災保険株式会社代理店
株式会社東海日動パートナーズ東東京
団体傷害保険資料請求担当 藤田あて
TEL 0120-161-808 FAX 0120-161-809
メール a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp

小島烏水顕彰碑制作にあたって寄付のお願い

—来年5月末まで期間延期

四国支部長 尾野益大

先月既報の四国支部による小島烏水顕彰碑制作について、さっそく全国の会員各位から心のもったご寄付が届き、感謝申し上げます。このたび、来年5月末まで受付期間を延期することになりました。

すでにお知らせした通り、四国支部は2013年4月13～14日に香川県高松市内で「小島烏水祭」を開催する準備を進めています。この際に、日本山岳会から寄託された銅製の烏水レリーフに烏水に関する事柄を記した陶板を埋め込んだ顕彰碑を、設置する予定です。顕彰碑の設置は、高松市内を予定しています。

顕彰碑の制作などに約300万円を要します。四国支部は会員の総力を挙げて費用ねん出にあっていますが、この企画にご賛同いただける全国の会員のみなさまにもぜひご協力いただきたいと願っています。ご寄付については、下記の通り承っています。会員のみなさまのお力添えをいただけますよう、お願い申し上げます。

* 寄付金額 1口3,000円 1人1口以上でお願いしております。

* 寄付受付期間 2013年5月31日まで

* 振込先 ゆうちょ銀行

1) ゆうちょ銀行から入金の場合

口座番号 01610-1-124362

加入者名 公益社団法人 日本山岳会四国支部

2) 他行から入金の場合

店名：六二八 店番号 628

口座番号 普通1437751 加入者名：同上

心苦しいお願いですが、振込手数料は各自でご負担願います。

日本山岳会団体傷害保険 加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

資料請求先

東京海上自動火災
グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東東京
団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Maila.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809

◆講演会「ヒマルチュリ登頂に今
の山登りをおもう」

東京多摩支部

ヒマルチュリ初登頂は1960
(昭和35)年5月24日。慶応大学
ヒマラヤ登山隊(隊長＝山田二郎)
によって踏破された。初登頂者は
田邊壽、原田雅弘の2人。当時、
日比谷公会堂で行なわれた報告講
演会の模様など、映像を交えて、
「52年前のヒマルチュリ」を語っ
ていただきます。入場無料。
日時 2013年1月27日(日) 16
時～17時30分

講師 田邊壽会員

会場 ザ・クレストホテル立川

3F「富士の間」

申込 岡義雄

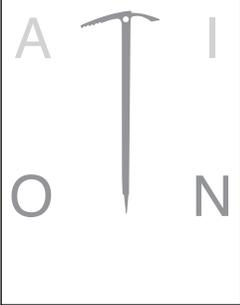
TEL 090(2140)5057

✉ okayoshio@ozzio.jp

◆川井靖元写真展 雪稜讃歌
〜光と風と雪と〜



インフォメーション



モノクロによる山岳写真展。写
真の原点であるモノクロ作品は意
図をストリートに表現できるうえ、
カラー作品にはない味わいがあり
ます。入場無料。

日時 2013年1月11日(金)～1
月24日(木) 10時30分～18
時(最終日は15時まで)休
館日：日曜

会場

エプソンイメー징ングギヤ
ラリーエプサイト(新宿区
西新宿2-1-1 新宿三
井ビル1F)

TEL 03(3345)9881

http://www.epson.jp/epsite/

◆岩橋宗至小品展 大地の彩

北アルプス・THE ROCKIES

半世紀にわたって撮り続けてき
た大地の彩に新作を加えて紹
介いたします。入場無料。

日時 2013年1月26日(土)～2
月11日(月) 12時～18時30

分(最終日は16時まで)休
館日：月曜(最終日11日)
は開場)

会場 ギャラリー青藍(港区六本
木3丁目15-19)

TEL 03(3589)0492

『木の目草の芽』11月号を発行

自然保護委員会

自然保護委員会機関紙『木の
目草の芽』11月号(最新号)を発
行しました。今号は、北海道で
5年おきに開催されている花の
一斉調査「フラーワソン北海道」
の紹介や、岐阜で行なわれた第
13回ライチョウ会議の報告など
を掲載しています。

機関紙は年6回隔月発行、購
読料は年間1000円(送料込
み)です。購読希望の方は左記ま
でご連絡ください。

申し込み：川口章子

TEL 047(463)8721

✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp

振込先(郵便振替)：00180
-4710688 加入者
川口章子



◆編集後記◆

●30代新入会員から、「晩餐会は
興味深い会だった」という便りを
もらった。会員減少、高齢化に歯
止めがかかったとしたら、それは
ユースクラブの地道な活動をはじ
め、会員各おのの努力にあったの
ではないか。さらに若い人たちが
惹きつけられるような会にしてい
きたいし、その役目をこの会報も
担わねばならないと考えている。

●一方で4月から会報を担当し、
わずか9ヶ月。何度も訃報に接し、
追悼記事を作った。登山史に残る
業績を重ねてきた方、語り継がれ
るべき方の訃報に、時の流れと言
いようのない寂しさを感じる。編
集部だけではとても作れない記事
であり、写真や略歴データの提供
などお仲間たちの協力を得て、毎
回作っています。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 811号

2012年(平成24年)12月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 柏 澄子
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社